



Title	巻頭言：医学部保健学科における看護学：新しい専門性の追究の問題点
Author(s)	小笠原，知枝
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2000, 6(1), p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56689">https://doi.org/10.18910/56689</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



## 巻 頭 言

### 医学部保健学科における看護学 —新しい専門性の追究の問題点—

#### Nursing under School of Allied Health Science in the Medical Department

#### —The Obstacles to Specific Fields of Inquiry in Nursing—

2000年4月には大阪大学大学院医学系研究科において、保健学専攻の博士課程後期課程がスタートする。何か今までに経験しないことが起こりそうな気配を感じさせる新ミレニアムの中での船出である。本学科は7年前、医療技術短期大学部看護学科から医学部保健学科看護学専攻に移行して発足し、大学教育の中で看護学の教育のあり方を模索しつつ、看護の学士、保健学の修士を出して来た。そして博士課程が誕生するのである。

思えば博士課程への道程は多難であった。省みれば大学の教官として、自己研修の時間も機会も十分とはいえない中で、学部学生の教育をしつつ、しかも修士課程、博士課程の認可を得るために、大きな努力が要請されてきた。そして教官一人ひとりの努力が評価された結果として、博士後期課程が発足したのである。

しかし、この船出は、決して順風満帆というわけではない。本学の看護学専攻は、保健学科という傘、さらに医学部という傘の下に存在している。この事態が看護学に対する教官のアイデンティティの意識を稀薄にしているのではないだろうか。加えて半数を占める医学系教官からなる教員組織の現実が、学生の看護研究に対するアイデンティティ意識の稀薄化や、偏差値重視によって学部選択をしてきた学生に影響を与えているように思われる。

博士課程では、ますます看護学分野の研究の質が問われることになるであろう。率直に言えば、このように看護関係者のアイデンティティの不確実な状況下で、看護研究や教育が円滑に機能するか否かが心配になるのである。学生自らが研究のテーマを選び、看護学の専門性を踏まえた看護研究を進めていくことは決して容易なことではないと思われる。

大学は、学問の専門性を追究する場である。専修学校や短期大学のように、直接、職業に必要な能力や技能の育成を主な目的にしているわけではない。したがって、教官も学生もまず看護学の専門性の追究とはどういうことかを認識する必要がある。

看護学の学術的発展を期待するならば、看護研究では、研究のテーマ、方法、論文の作成において、看護学の独自性、アイデンティティが自覚されていることが大切と考える。としたら、病気やその治療自身が看護研究のテーマにはならない。たとえ、看護学専攻教官や学生がそうしたテーマの研究を試みたとしても医学の研究者に勝つことは容易なことではないだろう。今日の社会では高度の先端医療が進む一方で、心理社会的な苦悩をもち看護サービスを期待している多くのクライアントがいることを認識しなければならない。そして、よりよい看護サービスの根拠を明確にするための看護研究をすすめることが期待されている。

平成11年1月

大阪大学医学部保健学科  
看護学専攻教授 小笠原知枝